

# 新型コロナウイルス感染症の関連用語に対する社会的許容度

横山 詔一 (国立国語研究所研究系)  
相澤 正夫 (国立国語研究所研究系)  
田中 牧郎 (明治大学国際日本学部)  
久野 雅樹 (電気通信大学情報理工学研究科)  
田中 祐輔 (青山学院大学文学部)

責任著者：横山詔一 (yokoyama@ninjal.ac.jp)

## 要旨

新型コロナウイルス感染症の関連用語に対する社会的許容度について統計的分析を行った。データは文化庁が2021年に「国語に関する世論調査」の一環として収集したもので、オープンデータである。分析手法はロジスティック回帰分析で、説明変数が回答者の生年(年代)と性、目的変数が社会的許容度であった。分析の結果、カタカナ語については生年(年代)と性の効果が有意であり、また、省略語については性の効果のみが有意であった。一方、漢字四字熟語については生年(年代)と性のいずれの効果も有意ではなかった。結果について語種や造語の観点から若干の考察を試み、今後の課題にも触れた。最後に良質なオープンデータの積極的な活用を主張した。

**キーワード**：新型コロナウイルス感染症関連用語、社会的許容度、「国語に関する世論調査」、ロジスティック回帰分析、生年差、年代差、男女差

## 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が2020年初めから世界規模で爆発的に拡大し、社会に大きな影響を与えた。既往の社会システムでは対応が困難な事象への措置や、住民全体に向けた即時性のある情報配信などが求められ、これまでになかった用語が、行政やメディアの発信する情報に含まれるようになった。中でも「ソーシャルディスタンス、ステイホーム、3密」などについては、国民の大部分が高頻度かつ短期間で集中的に当該用語に接触するという特異な状況がみられた。そのため、接触頻度の生年(年代)差や男女差は、前例がないほど小さいものだったと仮定できそうである。ここでは、このような特別な条件下で収集された全国規模の大量の調査データに基づいて、新型コロナウイルス感染症関連用語の適否に関する国民一般の社会的許容度(social acceptability)を検証する。

分析対象とする語は、単なる新語・流行語の類ではない。新奇な語ではあるが、生存に関わる重要語として行政主導によるトップダウンの形で短期間のうちに一方的に世の中に流通したと想定されるものである。しかし、まさに緊急事態の状況下において、それらを受け止める側の国民一般が合意形成や確認に割ける時間は実質的にはなく、意識や意見は不明のままであった。本研究は、危機における情報発信の用語のあり方を考える上での基礎的資料作成の一環として、回答者の属性による語ごとの許容実態の違いとその要因を明

らかにするとともに、言語意識に関する大量データを分析するための簡便な新しい手法を提唱することを目的とする。

なお、この研究は公共の言語問題に対する国立国語研究所の二つの研究実績を踏まえて行われたものである。具体的には、2002年から2006年まで実施した「外来語」言い換え提案 (<https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/>) と2007年から2009年まで実施した「病院の言葉」を分かりやすくする提案 (<https://www2.ninjal.ac.jp/byoin/>) の理念を尊重し、そこで開発された研究手法を随所で参考にしている。その理念とは、公共的な伝達場面で難解な用語を用いる場合は、言い換えや説明などの工夫が必要で、その工夫に資するような、用語の実態調査や意味伝達についての研究が不可欠であるというもの、また、研究手法とは、重要な用語が人々にどのように受け止められているかについて社会の各層に対して調査し、得られたデータを多角的に分析して用語を類型化していくというものである。

## 2. データについて

### 2.1 オープンデータの利用

『令和2年度 国語に関する世論調査〔令和3年3月調査〕<sup>1</sup>』に掲載されている数表を用いた（これはオープンデータである）。以下、この調査報告書を「文化庁報告書（2021）」と略称することがある。

本研究は、文化庁報告書（2021）の22～26ページに示されているデータについて、「この言葉をそのまま使うのがいい」と回答した割合（％）を、その語に対する「社会的許容度」と定義する（具体的な質問項目と選択肢は2.4で述べる）。文化庁報告書（2021）には本稿で言うところの社会的許容度について、生年（年代）差、男女差、地域差の要点がまとめられている。そこには統計的検定などは登場しないが、記述の内容は妥当であり、説得力を有する。しかし、社会的許容度と生年（年代）などの関係を示すグラフは掲載されていない。また、調査対象語のタイプ分けなどもなされていない。このように、文化庁報告書（2021）で記述されていることは、データから得られる情報の一部に過ぎないことも容易に想像できる。

### 2.2 サンプル数など

文化庁報告書（2021）の調査は、全国規模、幅広い年齢層（16歳以上の個人）、ランダムサンプリング（層化2段階抽出法）、という3つの特長を有する。これにより、日本国民全体を代表するデータの収集が可能になる。ランダムサンプリングによる調査対象者数は6,000名、有効回収数は3,794名（回収率63.2%）であった。回収率は5ポイントほど女性の方が高かった。

### 2.3 調査の方法

当該調査はネット調査ではなく、郵送法であった。文化庁が実施してきた「国語に関する世論調査」は、前年度までは面接聴取法であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防

---

<sup>1</sup>文化庁（2021）：  
[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/kokugo\\_yoronchosa/pdf/93710501\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/93710501_01.pdf)）

止の観点から郵送法に変更された。調査実施機関は中央調査社（1954年設立）であった。調査時期は2021年3月4日から同年3月29日までであった。この時期は新型コロナウイルス国内感染の報道開始からほぼ1年経過した時点である。

## 2.4 質問と選択肢

文化庁報告書（2021）における問4の質問項目を分析の対象とした。具体的には次の通りである。

問4 ここに挙げた（1）～（8）の言葉の使われ方について、どのように思いますか。あなたのお考えに最も近いものをそれぞれ一つずつ選んでください。

（1）コロナ禍、（2）ソーシャルディスタンス、（3）3密、（4）濃厚接触、（5）クラスター、（6）不要不急、（7）ステイホーム、（8）ウィズコロナ

【選択肢は3つ】

- ・この言葉をそのまま使うのがいい
- ・この言葉を使うなら、説明を付けたほうがいい
- ・この言葉は使わないで、ほかの言い方をしたほうがいい

上記の選択肢の2番目は言葉への補足説明を必要とする「言い添え派」で、3番目は言葉そのものの使用を回避する「言い換え派」だと言えよう（相澤 2012）。これらの選択肢は、いずれもその言葉をそのまま使うことを許容せず、何らかの手当てが必要だとしている点で、無条件に使用を許容している1番目の選択肢とは質的に異なるものである。

## 3. 分析の方法

### 3.1 社会的許容度について

2.1で述べたように、問4の各語に対して「この言葉をそのまま使うのがいい」と回答した割合（%）を、その語に対する「社会的許容度」と定義する。調査対象8語を、文化庁報告書（2021）の22ページの記述に基づいて、社会的許容度の高い語から並べると次のようになる。

不要不急(67.2%)、コロナ禍(66.8%)、3密＝ステイホーム(61.1%)、濃厚接触(58.9%)、  
ソーシャルディスタンス(56.5%)、クラスター(51.3%)、ウィズコロナ(29.7%)

以下、文化庁報告書（2021）の26ページに掲出されているクロス集計表に基づいて分析を進める。クロス集計表だけでは直観的に全体の傾向を理解するのが難しいところがあるため、調査対象8語についてグラフを図1に示す。グラフは、横軸すなわち独立変数を年代、縦軸すなわち従属変数を社会的許容度とする。

調査対象8語のうち、カタカナ語はいずれも女性の方が男性よりも社会的許容度が高くなっているように見える。また、カタカナ語でも年代差の大きさに違いがある。「ソーシャルディスタンス」の年代差は顕著だが「ウィズコロナ」は年代差があるのか、目視だけでは判断に迷う。

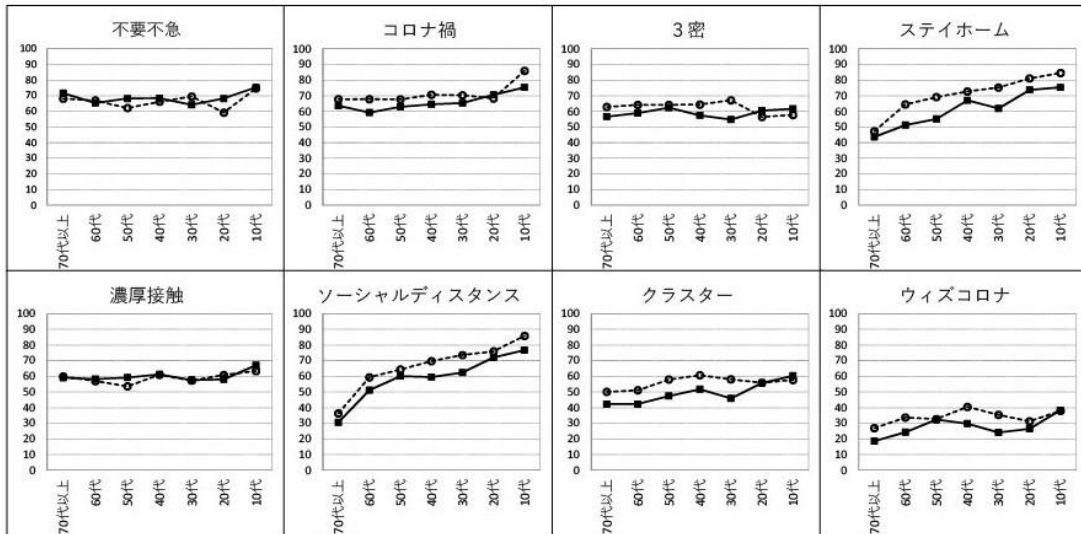


図1 調査対象8語の年代別社会的許容度（許容度の高い順、男が実線で女が点線）

### 3.2 調査対象語のタイプ分けの方法

より多角的な考察のために、調査対象8語をタイプ分けする。その際に、今後実施されるかもしれない経年調査（実時間調査）の結果の数値予測も視野に入れたロジスティック回帰モデルを作成する。計算の便宜上、生年の数値としては公開データの各年齢区分の生年中央値を利用した（久屋 2016）。また、公開データでは、年齢の最下限は「16～19 歳」のように明記してあるものの、年齢の最上限は「70 代以上」とあるだけで明記されていないため、この年代での年齢幅は 70-79 歳とみなすこととした（久屋 2016）。この後、本研究で「生年（年代）」という表記をしばしば使い、グラフでも両方の表示をしているのは、以上のようなデータ解析上の理由による。

ロジスティック回帰モデルは、生年（年代）と性の2つの説明変数で社会的許容度を予測する一般化線形モデル（Generalized Linear Model、以下 GLM）を作成する。変数の有意性検定のほか、モデルの予測精度についても検討する。

説明変数の有意性検定に基づく形で「生年（年代）差」の有無と「男女差」の有無の組み合わせを設けると4つのタイプができる。それを利用し8語を以下のタイプ A からタイプ D までの4タイプのいずれかに分類してみる。

- タイプ A：生年（年代）差があって男女差もある。
- タイプ B：男女差だけある。
- タイプ C：生年（年代）差だけある。
- タイプ D：生年（年代）差も男女差もない。

## 4. 結果

### 4.1 調査対象語のタイプ分けの結果

生年（年代）と性の2変数から社会的許容度を予測する GLM ロジスティック回帰モデルを語ごとに作成した。モデル式は以下の通りである。生年を  $x_1$ 、性を  $x_2$ 、定数を  $c$  とし

ている。

$$\text{確率 } p = 1 / [1 + \exp(-Z)]$$

$$\text{ただし } Z = a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + c$$

生年の係数（重み） $a_1$ と性の係数 $a_2$ のほか、有意性検定の結果（5%水準で有意な場合は $p$ 値）の一覧を表1に示す。

表1 GLM ロジスティック回帰モデルによる係数推定の結果

	生年		性		定数
	係数	有意性	係数	有意性	
コロナ禍	0.005932	<1%	0.230844	<0.1%	-11.092796
ソーシャルディスタンス	0.034403	<0.1%	0.292903	<0.1%	-67.542429
3密	-0.0003872	なし	0.1986834	<1%	1.1057934
濃厚接触	0.001419	なし	-0.041566	なし	-2.407982
クラスター	0.008689	<0.1%	0.324404	<0.1%	-17.215852
不要不急	-0.001442	なし	-0.103696	なし	3.611447
ステイホーム	0.027383	<0.1%	0.386338	<0.1%	-53.589912
ウィズコロナ	0.008902	<0.1%	0.335409	<0.1%	-18.564394

表1にもとづいて調査対象8語を分類すると以下のようになる。

- 先に定義したタイプA（生年（年代）差と男女差の両者が統計的に有意）：カタカナを含む「コロナ禍、ソーシャルディスタンス、クラスター、ステイホーム、ウィズコロナ」の5語。このタイプの語の社会的許容度は、女性>男性、若年層>高年層である。
- タイプB（男女差のみ統計的に有意）：「3密」（アラビア数字あるいは漢数字と漢字一字とで構成される一種の省略語）の1語。社会的許容度は、女性>男性である。
- タイプC（生年（年代）差のみ統計的に有意）：今回の8語には存在しなかった。
- タイプD（生年（年代）差も男女差もなし）：漢字四字熟語の「濃厚接触、不要不急」の2語。

#### 4.2 統計モデルによる予測値について

社会的許容度の予測モデルのうち、典型的な例をグラフで示す。グラフでは予測値を点線で、実測値を実線で示す。

まず、「ソーシャルディスタンス」（男女）、「不要不急」（男）、「ウィズコロナ」（男）の3語について、予測値（すなわち理論値）を図2に示す。このグラフでは、タイプA（生年（年代）差と男女差の両者が統計的に有意）の代表として「ソーシャルディスタンス」（男女）と「ウィズコロナ」（男）を、タイプDの代表として「不要不急」（男）を取り上げた。タイプAとタイプDは、その違いが一目瞭然であろう。そのほか、同じタイプAでも「ソーシャルディスタンス」と「ウィズコロナ」ではグラフの傾きの大きさ、すなわち生年（年代）差の大きさに違いがあることが分かる。

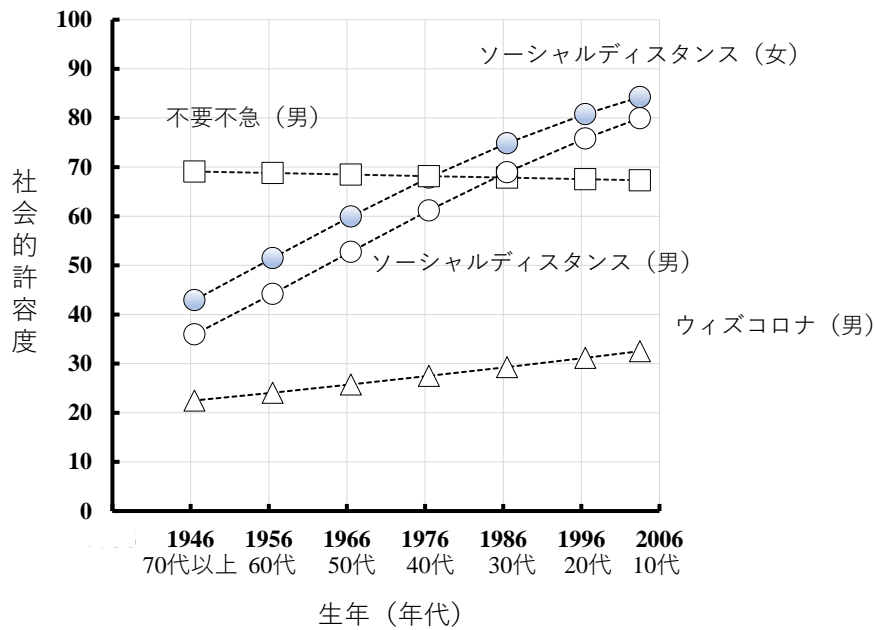


図2 「ソープシャルディスタンス」(男女)、「不要不急、ウィズコロナ」(男)の社会的許容度予測

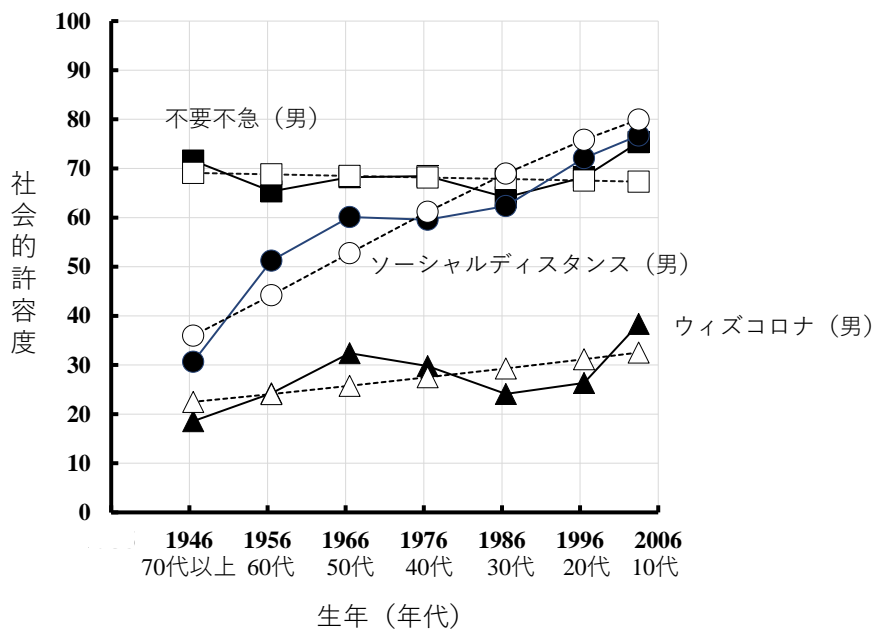


図3 「ソープシャルディスタンス、不要不急、ウィズコロナ」(男)の予測値と実測値

次に、「ソープシャルディスタンス、不要不急、ウィズコロナ」の3語の男性のデータについて、予測値(点線)と実測値(実線)を併せて図3に示す。実測値のグラフしかない場

合は、見かけ上の数値の変動、すなわちノイズによる上下動なのか、そうでないのかの見極めや判別に非常に迷うことになる。この場合、研究者個人の主観で決めることは危険である。結果的に、「不要不急」と「ウィズコロナ」が異なるタイプである（かもしれない）ことを見逃すことになるからである。

この点をさらに検討するため、「不要不急」と「ウィズコロナ」の2語に絞ったグラフを図4に示す。この図を見ると、研究者はますます判断に困るであろう。実測値のグラフは両者とも上下の変動があり、予測値のグラフは「不要不急」と「ウィズコロナ」の両者とも傾きが小さい。そのため、目視だけに頼っていると、よく似ているようにも思えてくる。このような場合に統計解析は有効であり、「不要不急」と「ウィズコロナ」は別のタイプに属することを研究者に教えてくれる。統計解析は、実測値のグラフの裏に潜在する変動を浮き彫りにするツールとして役に立つ場合がある。ただし、統計解析で得られた結論だけをもってそれが真であるとは言えないことに留意しなければならない。

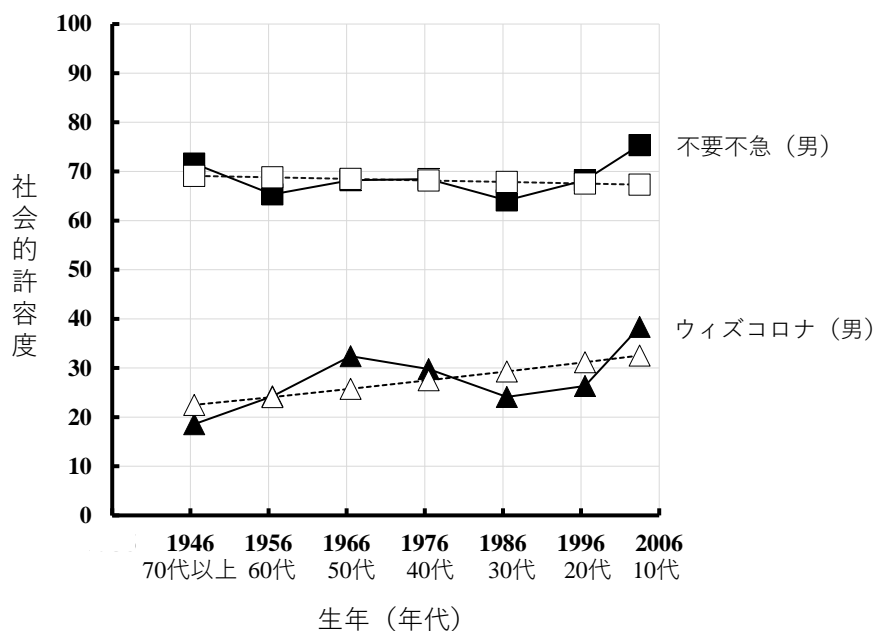


図4 「不要不急、ウィズコロナ」(男)の予測値と実測値

## 5. 考察

新型コロナウイルス感染症の関連用語については、生年(年代)、性、居住地域に関係なく、ほぼすべての人が短期間に高頻度で接触したと考えられる。そのため、接触頻度の生年(年代)差、男女差、地域差は、前例がないほど小さかったと仮定してよいだろう。本研究は、このような特別な条件下で収集された全国規模の大量データに基づいて、新型コロナウイルス感染症関連用語の社会的許容度を検証した一つの試みとすることができる。

### 5.1 カタカナ語について

まず、調査対象になった語のなかで、「ウィズコロナ」の社会的許容度が、特に低いことが注意される。これは、社会的許容度の高い「ステイホーム」や「ソーシャルディスタン

ス」が、万人に対する行動宣言の呼びかけの場面で頻繁に使われ、誰にとっても接触する機会が非常に多かったと考えられるのに対して、「ウィズコロナ」は、コロナウイルス感染症と共存しなければならない社会のあり方について議論するような場面で使われやすかったことから、そのような議論にあまり関心のない人にとっては接触する機会が少なかった語であったからなのではないか。その意味では、当該用語が示す内容や方針そのものに対する賛否や関心の度合いが、数値に影響を与えた可能性も排除できない。

一般的に、カタカナ語などの新語は若年層で使用され始め、時間をかけて徐々に中年層や高年層に広がることで生年（年代）差が生じると考えられている。しかし、今回はどの生年（年代）も同時に一気に同じ語に接触しているにもかかわらず、カタカナ語の社会的許容度で生年（年代）差が生じた。この理由について、現時点では明確な説明ができないが、仮説の一つとして以下のようなことが考えられる。例えば「ソーシャルディスタンス」については「ソーシャル」＋「ディスタンス」で構成されるが、高年齢層は当該カタカナ語のこうした掛け合わせての使用に不慣れたために、生年（年代）差が大きくなり、グラフの傾きも大きくなった可能性がある。単独で用いることは許容できても、組み合わせられた際に許容できなくなる側面が存在するのではないかと推察されるのである。

また、すべてのカタカナ語で社会的許容度に男女差が見られ、女性の方が高かった。久屋（2016）が外来語の研究で男女差が明確に出ることを指摘しているが、今回の結果も同様の事例を追加したことになる。ただし、その理由の説明は今後の研究課題である。

## 5.2 新造の省略語について

感染回避のポイントを伝える簡潔な新造の標語として流通したのが「3密」である。ただし、この語自体は「3つの「密」の付く用語」というヒントを示すのみの省略語であり、「密閉」「密集」「密接」の3点に注意を喚起している点まで知らなければ、十分な実効性は期待できない。注意喚起力には優れるが、用語の内実が希薄になるおそれのある語だと言えるだろう。今回の分析では、社会的許容度に男女差（女性＞男性）のみが認められたタイプBに属する唯一の語である。

一方、5.1のカタカナ語に含めて扱った「コロナ禍」にも男女差（女性＞男性）が認められたが、この「コロナ」自体が短期間に「新型コロナウイルス感染症」から「新型コロナ」などを経て新造された究極の省略語であり、また「禍」もこの感染症がもたらした災い全般を表す最短の省略語としてこの形に落ち着いたように見える。新造の省略語に対する社会的許容度の観点から男女差の分析をすることも、今後の課題の一つとなる。

## 5.3 漢字四字熟語について

「不要不急」は、今般の新型コロナウイルス感染症の蔓延以前から台風接近時などにマスメディア等に登場していたので、新語ではなく準新語と言うべきかもしれない。また「濃厚接触」という語自体は、従前から性的な文脈で使用されてきた可能性がある。いずれも、各種のコーパスを利用して通時的に用例等を調べて検証する必要がある。

今回の分析では漢字語に限って生年（年代）差も男女差も認められないタイプDに分類されたが、ここにはむしろ学歴差が関与している可能性が考えられる。また、全国で一気に接触したにもかかわらず、「濃厚接触」では四国と東北で社会的許容度に16ポイ



ント強の無視できない差がある。このような地域差の原因の検討も今後の課題としたい。

## 6. おわりに

政府機関が公開する統計資料は、公共財すなわち国家の社会インフラの一環であるから、その多くは代表性を有するデータに立脚することを前提にしている。ランダムサンプリングは当然のこととして、年齢層の幅が広いこと、全国規模であることが求められる。その背景には、公共の責務を全うするためには広く社会の納得が得られるような科学的な根拠が不可欠だという理念がある。

本研究で使用了「国語に関する世論調査」のデータは、ランダムサンプリング、幅広い年齢層、全国規模の調査、という3つの条件をすべて満たしている。これまで、「国語に関する世論調査」のデータを学術研究に積極的に活用したものとして井上（2017）、久屋（2016, 2021a, 2021b）などがあり、武田（2021）は文化庁の担当者の立場から、調査の概要や課題を述べた上で、学術的に活用されることへの期待も述べている。これらの先行研究を参考にしながら、「国語に関する世論調査」のデータの統計解析を今後も積極的に推進していく必要があるだろう。

## 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 21K00551 と、国立国語研究所共同研究プロジェクト（基幹型）「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」の成果の一部である。

## 文献

- 相澤正夫（2012）「専門家と非専門家の橋渡し — “言葉の補助輪、のすすめ—」『日本語学』31 巻13号, 36-45 明治書院
- 文化庁（2021）『令和2年度 国語に関する世論調査〔令和3年3月調査〕』  
[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/kokugo\\_yoronchosa/pdf/9371050\\_1\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/9371050_1_01.pdf)
- 井上史雄（2017）『敬語は変わる：大規模調査からわかる百年の動き』大修館書店
- 国立国語研究所（2002-2006）「外来語」言い換え提案 <https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/>
- 国立国語研究所（2007-2009）「病院の言葉」を分かりやすくする提案  
<https://www2.ninjal.ac.jp/byoin/>
- 久屋愛実（2016）「見かけ上の時間を利用した外来語使用意識の通時変化予測」『日本語の研究』12 巻4号, 69-85  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihongonokenkyu/12/4/12\\_69/\\_article-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihongonokenkyu/12/4/12_69/_article-char/ja/)
- 久屋愛実（2021a）「「国語に関する世論調査」に見る外来語の動態—外来語を考える四つの視点—」『日本語学』40 巻2号, 84-94, 明治書院
- 久屋愛実（2021b）「英語由来語彙を公共コミュニケーションでどう運用するべきか：全国調査のデータを活用した福祉言語学的考察」『計量国語学』33 巻3号, 130-145  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/mathling/33/3/33\\_130/\\_article-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/mathling/33/3/33_130/_article-char/ja/)
- 武田康宏（2021）「「国語に関する世論調査」とは何か：国語施策の立案と興味・関心の喚起を目的として」『日本語学』40 巻2号, 4-15, 明治書院

Title:

Social acceptability of COVID-19 infection-related terms

Authors:

YOKOYAMA Shoichi, Research Department, National Institute for Japanese Language and Linguistics

AIZAWA Masao, Research Department, National Institute for Japanese Language and Linguistics

TANAKA Makiro, School of Global Japanese Studies, Meiji University

HISANO Masaki, Graduate School of Informatics and Engineering, The University of Electro-Communications

TANAKA Yusuke, College of Literature, Aoyama Gakuin University

Abstract:

A statistical analysis of the social acceptability of COVID-19 infection-related terms was conducted. The data were collected by the Agency for Cultural Affairs in 2021 as part of the “Opinion Survey on the Japanese Language”. The method of analysis was logistic regression analysis, with the explanatory variables being year of birth (or age) and gender, and the objective variable being social acceptability. The results of the analysis showed that the effects of year of birth (or age) and gender were significant for katakana words, and only the effect of gender was significant for abbreviated words. On the other hand, neither the effects of year of birth (or age) nor gender were significant for the four-character kanji phrases. Some discussion of the results was attempted from the perspective of word types and coined words, and future issues were also touched upon. Finally, we argue for the active use of high-quality open data.

Keywords: COVID-19 infection-related terms, social acceptability, “Opinion Survey on the Japanese Language”, logistic regression analysis, birth-year difference, age group difference, gender difference

### 倫理チェックリスト

以下 Q1 から Q14 まで、末尾に同意文書の書式も添付

- 利益相反 (Conflict of Interest: COI) の開示 → Q12 で記述
- 著者の貢献 (Author Contributions) の記載 (著者が複数の場合) → Q9-2 で記述

Q1. 研究を行うにあたり、所属または関連機関の倫理委員会の承認を得ましたか。

A1. いいえ。

理由：本研究が使用したデータの出典は、すべて『令和2年度 国語に関する世論調査 [令和3年3月調査]』（文化庁、2021）に掲載された数表に示されたものであり、PDFがネット公開されている。これはオープンデータであり、著作権の問題はない。よって、

倫理委員会の承認は必要ない。

Q2. 実験や調査に先立ち研究参加者からインフォームド・コンセントを得ましたか。

A2. いいえ。

理由：上記 A1.と同じ。

Q3. やむをえずインフォームド・コンセントが得られない場合は、代替となる手段をとりましたか。（親や責任者による承諾を得るなど）

A3. いいえ。

理由：上記 A1.と同じ。

Q4. 実験や調査においては、研究参加者や動物に負荷やリスクはありませんでしたか。

A4. なかった。

Q5. 実験や調査にデセプションがありましたか。

A5. いいえ。

Q6. 動物実験においては、必要最小限の個体数で実験しましたか。

A6. 該当せず（動物実験は実施せず）。

Q7. プライバシーは保障されていますか。

A7. はい（報告書に個人名の記載はない）。

Q8. 論文は著者自身によるオリジナルの論文ですか。

A8. はい。

Q9-1. 著者が連名である場合、連名者全員から投稿の承諾を得ていますか。

A9-1. はい。さらに、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示について「CC BY」とすることについても連名者全員の賛同・承諾を得ている。この点の詳細は Q13 も参照されたい。

Q9-2. 著者名の順序は貢献度を適切に反映していますか。

A9-2. はい。具体的な貢献度は連名著者順に次のとおりである。

横山詔一：論文の構想を提案，データ解析，論文執筆，投稿の統括

相澤正夫：論文執筆

田中牧郎：問題意識の提供、論文の一部を執筆

久野雅樹：統計解析のサポート、分析結果のチェック

田中祐輔：論文の一部を執筆、書式の統一、関連資料調査のサポート

Q10-1. 他者が作成した材料やプログラムを用いたり、図表や本文を引用したりした場

合、その出典は示されていますか。

A10-1. はい。

Q10-2. 原著者からの承諾を得ていますか。

A10-2. いいえ。オープンデータであるため、その必要はない。

Q11. 不適切、あるいは差別的な用語や表現がないかチェックしましたか。

A11. はい。

Q12. 企業などと共同研究を実施、あるいは企業などからの助成を受けましたか。(利益相反 (COI : Conflict of Interest) について、研究の公正性、信頼性を確保するためには、利害関係が想定される企業などとのかかわりについて、適切に対応する必要があります。)

A12. いいえ。

Q13. 共著者との共同研究である場合、各著者はその公表の仕方についても相互に十分な説明のもとで同意をしていますか。(クリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示については、全ての著者がその具体的に意味するところを十分に承知している必要があります。)

A13. はい。同意文書に残すかたちで十分な確認をしている。

Q14. 生成系 AI によるサポートを受けましたか。

A14. いいえ。

参考：同意文書の書式

#### Jxiv 投稿にあたっての同意について

(筆頭著者氏名) 様

私は次に示す論文の共著者として、Jxiv への投稿、及びクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示について十分に理解したうえで、下記の3点すべてに同意します。

論文表題：(○○…)

共著者名：(筆頭著者・共著者 A・B・C…)

記

1. Jxiv に上記の共著者順により投稿すること
2. 投稿論文のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示を「CC BY」とすること

3. その後に学術雑誌等に投稿する場合も、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示を「CC BY」とすること

2022年\*月\*日  
(共著者自署)